

審査講評

公益財団法人ロッテ財団
研究助成事業 選考委員長

1. 2025年度研究助成の応募状況

当研究助成事業の第12回目となる今年度の応募数は、「研究者育成助成〈ロッテ重光学術賞〉」が8件、「奨励研究助成【1】(自然科学基礎研究)」が189件、「奨励研究助成【2】(自然科学応用・実装研究)」が38件、「奨励研究助成【3】(人文/社会科学研究)」が24件でした。応募数は、「研究者育成助成」は昨年度の13件から減少しました。「奨励研究助成【1】」は、昨年度大幅増となった151件からさらに増加しました。また、【2】についても、昨年度20件から2倍近く増加しました。【3】においては、昨年度とほぼ同様の件数の応募がありました。

関係各位のご努力により、「研究者育成助成〈ロッテ重光学術賞〉」については一定数の応募が得られました。また「奨励研究助成」への応募者数の増加は、これまでの財団の活動が浸透しつつあるものと評価できるものと思います。

2. 選考方法、観点

当助成事業の選考委員会を構成している選考委員で申請書全件の書面審査を行い、選考委員会にて活発な議論を交わしたうえ、「奨励研究助成」の最終候補者を決定いたしました。また、「研究者育成助成」においては、まず書面審査と選考委員会での面接候補者を選考し、後日、面接審査も併せて選考を実施いたしました。

選考にあたっての審査の観点は以下の通りです。

「研究者育成助成〈ロッテ重光学術賞〉」は、食・健康に関する分野において、将来的に卓越した世界水準の研究を成し遂げると期待される若手研究者を発掘し、育成することが目標となっています。このため、申請者が将来、自身の研究分野を切り拓き、同時に切り拓いた研究分野を先導し、社会のために広く貢献していける能力を有する研究者かどうか、さらに、食・健康分野でどのように将来を展望しようとしているのかに主眼をおいて審査を行いました。

「奨励研究助成」は、【1】自然科学基礎研究、【2】自然科学応用・実装研究、および【3】人文/社会科学研究の3助成区分からなり、将来、国際的に活躍する可能性を秘めた、優秀で志の高い若手研究者を対象とし、自然科学から人文/社会科学までの広域にわたる食・健康分野において、研究上の独創性、チャレンジ性、萌芽性および将来性について審査を行いました。また、【2】自然科学応用・実装研究では、旧助成者からの応募も見られ、社会実装への可能性、研究の進捗なども含めて審査しました。

3. 選考結果

2024年8月22日の選考委員会にて、「奨励研究助成」(自然科学基礎研究、自然科学応用・実装研究、人文/社会科学研究)の助成対象候補者、ならびに「研究者育成助成〈ロッテ重光学術賞〉」の面接候補者を選出、続いて9月19日の選考委員会にて、「研究者育成助成」の助成対象候補者を面接審査にて選出しました。そして、10月7日の理事会において採択を決定して頂きました。

4. 採択課題の紹介

「研究者育成助成〈ロッチ重光学術賞〉」において採択された課題を紹介いたします。

今回採択された課題は、東京大学高齢社会総合研究機構・飯島勝矢教授研究室に在籍する田中友規特任助教による、「All 健口健康を実現する地域モデル協創：オーラルフレイルを軸とした課題解決型実証研究」です。

田中氏の今回の申請は、オーラルフレイル対策を基盤としたフレイル予防モデルを構築し、多角的な介入を通じて地域全体の食と健康向上を目指す先進的な試みです。研究内容は以下の4項目から構成されています。

- ① 地域在住高齢者のコホート調査を活用したオーラルフレイルの予測因子と食・健康との時系列的な関連性の分析
- ② 住民主体・産官学民協働による集団教育モデル「進化版カムカム教育」の開発、及びその有効性の評価
- ③ 健康保険・医療・介護データの利活用、及び医療連携によるリスク保持者の特定を支援する方法の確立
- ④ 上記3項目を統合した多角的コミュニティ介入効果とフィジビリティの検証、及び広域展開・持続可能な多角コミュニティ介入モデルの構築

上記研究項目により、口腔機能の軽微な衰えが重複したオーラルフレイルと食事の質の関連性を明確にし、栄養改善や食事指導のガイドライン作成が可能になるとともに、住民主体の集団教育モデルを通じて食事の質向上や健康行動の最適化を可能にしようという提案です。また、参加住民の栄養状態や食習慣の改善を通じ、全体的な健康状態の向上を目指します。さらには、自治体が保有するレセプトデータを活用し、リスク保持者を特定し、個別フィードバックを可能にしようという試みです。本研究は、疫学研究からの新知見を基盤としており、オーラルフレイルを中心に据えた多角的なフレイル対策を提案するものです。多角的コミュニティ介入モデルの開発と評価を通じ、学術的知見の深化と社会課題の解決が期待される点で、高い意義を持つものと高く評価されました。我が国は世界で最も高齢化が進んでいる国の一つであり、住民の健康寿命の延伸とウェルビーイングの向上が求められる中、こうした先進的な提案は歓迎すべきものであり、本研究の更なる発展を通して、提案者の次世代フレイル予防研究のリーダーとしての活躍が期待されます。

続いて、「奨励研究助成」を紹介いたします。

「奨励研究助成【1】(自然科学基礎研究)」では、先ほど申し上げましたように、189件の応募があり、当初の採択予定数を引き上げることになりました。応募課題の特徴としては、例年と比較して歯周病など歯学研究に関する提案の増加が顕著でした。また、女性研究者の採択者数は、助成対象者28名のうち7名でした。採択課題としては、歯学研究に限らず、プロバイオティクス、抗酸化剤研究、食の感覚機能や老化予防など、食と健康に関する研究を含めてバランスよく採択されています。特に、食と健康に関するアプローチの仕方や方法論などの基礎研究に関して、革新的な申請課題が目立ち、選考委員を唸らせる提案もありました。全体としてオリジナリティの高いものが多く、採択者の大部分が、過去3年間に公的助成を得ていることから、研究レベルの高さが裏付けされていると思います。

「奨励研究助成【2】(自然科学応用・実装研究)」は、今年は38件の応募があり、7件の研究課題が採択されました。ロジスティックに関連した研究やコホート研究など、より研究目的の明確な応用研究が多く見られました。

「奨励研究助成【3】(人文/社会科学研究)」においては、24件の応募があり、7件の研究課題が採択されました。人文/社会科学研究ならではの食に関連した様々な研究が採択されており、食品のマーケティングや食文化など、この研究分野は幅広く、応募数をいかに多くするかは重要な課題として残っています。

「研究者育成助成」「奨励研究助成」とともに、第12回研究助成対象者としてふさわしい優秀な若手研究者が選出されました。本財団からのサポートを基盤に成果を上げられ、食・健康分野の発展に多大な貢献がなされることを期待しております。